

卷頭言

学校長 江藤恭二

I

研究紀要第21集は、共同研究・教科研究・特別研究および報告の三部門によって構成されている。本校の共同研究体制は、現在五つの研究グループに分かれています、それらを次に紹介すれば、

- 1) 教育課程（大学入試と高校の教育課程との関連、多層化した生徒に適応した教育課程、等の探求）
- 2) 授業の追求と改善（授業における教師と生徒との関わり、生徒のつまずきを生かす授業、視聴覚的教育手段を加味した授業、等の探求）
- 3) 教育工学に関する研究（T・Mの紹介テープ再編成、教生の意識変動調査、各自のプログラム修正・検討、V・T・Rの利用法、等の探求）
- 4) 生徒指導（多層化する中・高校生の生徒指導上の問題点の探求）
- 5) 六ヵ年学習成績変動の追跡

の各グループである。

これらの共同研究体制以外に、各自が単独のテーマを追求していることはいうまでもない。

本紀要においては、以上の共同研究のうち、四つのグループの成果が、また各教科における十一の研究成果が、特別研究・報告として二篇の成果が発表されている。それらはすべて研究担当者の日常的な教育実践を基盤として成立したものといってよいであろう。

それゆえ、これらの成果の巻頭に掲げる概説的論述として、日頃「教授学理論の史的考察」に関心を寄せる筆者は教授学理論の現代的視点を二、三摘記することによって責めをふさぎたいと思う。

II

科学革命の時代（17世紀）を背景として、ヨーロッパ（とくにドイツ）に生起した教授学（Didaktik）あるいは教授方法論といわれるものは、教育の効率を合理的な手段を通して一層能率的に高めようとするための学問領域であり、方法論である。教育の活動は、元来、教師・教材・被教育者を包含する一つの全体的な活動であって、一定の目標に向かって計画的に推進させられるべき過程的な生起である。従って、教授学は、教育者についても、教材についても、被教育者について

ても、さらにはこれらの活動の行なわれる場の条件についても考察を加えなければならぬとともに、それらの部分の特質から決定される具体的な形式、すなわち個々の教授方法についても顧慮を拂わなければならない。さらには、これらの具体的な諸々の教授方法をこえた一般的な条件、例えば、記憶、理解、思考を含む學習の法則、意志・欲求・疲労・飽和等の心理的な行動の法則、等も教授学の関説すべき問題である。さらに、教育活動は教師と被教育者との社会的な活動としてとらえられるがゆえに、指導ならびに影響の場としての社会的・心理的法則をも考慮しなければならず、また、被教育者の精神発達の程度、興味の強さ・方向・種類等の省察を怠ってはならないのである。

以上の指摘から必然的に導き出されることは、教授学理論（具体的な授業研究の方法論も含めて）の探求のためには、教育学・心理学・社会学、社会心理学、等々の諸学問領域の学際的な協力体制による研究が必要であるということである。この点に関していえば、本校の教育実践の理論的基礎づけへの指導・助言を、従来にもまして学部諸教官から積極的に得たいところであり、かかる学際的視点からの指導・助言を通じて本校の教育・研究体制は一段と生彩を放つものになるであろうことを確信したい。

教授学理論のそもそもの狙いであった「教育の効率化」の現代における典型的なあらわれは教育工学的アプローチであるといつてもよいであろう。本校においても、このアプローチは着実に積み重ねられてきている。「教育の効率化」を成就するためには、先ず教育の科学化、実証化が前提とされなければならない。教育の科学化というのは、教育の内容や方法に現代科学の成果を吸収することのみを意味するのではない。大事なことは、教育活動そのものを科学的研究の対象とし、それを実証的・仮設検証的に研究するということであり、過程的な生起への科学的着眼ということである。教育に機器を導入することも、この科学化のおさえがあつてはじめて教育の効率化に貢献するであろう。教育工学は、教育の効率を最大ならしめるために、それらの要因を分析し、選択し、構成し、制御する機能をもつ。教育は、元来（先述したように）、一つの全体的な活動であり、生きたシステムである。すなわち、

教師、教材、被教育者、教具、施設、設備など多くの部分あるいは要素が相互に影響しあいながら、教育の効率を規定している生動的なシステムなのである。

教授学（その現代的一顕現としての教育工学）によって、教育が効率化されていくためには、教授学（教育工学）の研究者または実践者の側に、教育を生きたシステムとして、全体的にかつ構造的に捉えようとする主体的な姿勢がなくてはならない。

学校における授業は、各教科に分かれて、日々具体的に展開されている。それはあまりにも継続的・日常的な行為であるがゆえに、ともするとマンネリズムに陥る危険性なじとしない。それを防ぐための一つの要因は、教授学理論の史的展開を通して洞察しうる教授

学理論（授業方法論）の本質の把握であろう。あえて、ラトケ、コメンスキイにまでさかのばる必要もない。ペスタロッチにせよ、デューイにせよ、秀れた先覚者たちの教授学理論、学習理論をひもとけば、上述の筆者の指摘する事柄の原理的要点が、より明細に、具体的に、個性的・創造的に展開されているのを知ることができる。

教授学上の古典の叡知に学びながら、現代の教育実践の向上のために、学際的な協力を基にした理論づけ・方向づけを獲得し、学校内部の民主的運営体制の中で積極的な教育・研究活動への取組みを展開することの重要性を指摘して、粗略な巻頭言の筆を擱くことにする。